

「戦没学生の音楽作品よ、甦れ！楽譜に命を吹き込み今、奏でたい」  
クラウドファンディング・リターンコンサート

のこされた楽譜を蘇らせ、後世に伝える

## 戦没学生のメッセージ

### ～アーカイブ推進コンサート 1～

◆第1部 ミニ・コンサート（進行：大石 泰）

橋本國彦 歌曲《をみなら起ちぬ》（深尾須磨子詩）

Mez：山下裕賀／Pf：松岡あさひ

鬼頭恭一 《女子学徒挺身隊の歌》

歌：藪内俊弥、山下裕賀／Pf：松岡あさひ

《無題（アレグレット イ短調）》

Pf：田中翔平

草川 宏 歌曲《秋に隠れて》（島崎藤村詩）

Bar：藪内俊弥／Pf：松岡あさひ

《軍隊生活》より

〈夏の朝、日の出前后〉

Pf：松岡あさひ

〈点呼ラッパ〉

Trp：古土井友輝

村野弘二 独唱曲《小兎のうた》（島崎藤村詩）

Mez：山下裕賀／Pf：松岡あさひ

詩曲《秋はむなしうして》

Pf：田中翔平

葛原 守 《自由作曲（オーボエ独奏曲）》

《オーボエ独奏曲（無題）》

Ob：河村玲於／Pf：松岡あさひ

◆第2部 スペシャル・トーク（進行：橋本久美子）

「音楽学徒のフィリピン戦線を追う

—南方戦の生還学徒兵 河村俊郎氏に聞く—」

2017年11月23日(木・祝) 14:00 開演  
東京藝術大学音楽学部内第2ホール

## +++++ <演奏曲目覚書> +++++

東京藝術大学音楽学部大学史史料室講師 橋本久美子

※作曲者の敬称は略させていただきます

### 橋本國彦 歌曲《をみなら起ちぬ》(深尾須磨子詩)

橋本國彦(明治37[1904]年9月14日～昭和24[1949]年5月6日、東京音楽学校在職:昭和4[1929]年11月20日～21[1946]年8月31日)の自筆譜3点が、東京藝術大学音楽学部声楽科卒業生の加宮葵氏から大学史史料室に届けられたのは2年前の平成27(2015)年11月4日のことであった。同年8月8日に亡くなられた御夫君・加宮令一郎氏(昭和19年東京音楽学校予科入学、ヴァイオリン、昭和23年3月卒業)が橋本國彦から未発表作品として手渡されいつも大事にしていたとのことであった。令一郎氏には「橋本先生は軍隊にでも行かれるのではないか」と映ったそうだが、橋本が召集された事実はなく、楽譜が加宮氏に託された事情も不詳である。

楽譜3点の内訳は、深尾須磨子作詞《をみなら起ちぬ》の管絃楽伴奏版が1点、同ピアノ伴奏版が1点、深尾須磨子作詞《花の誓ひ》の管絃楽伴奏版が1点である。《花の誓ひ》についての紹介は別の機会に譲る。今回の演奏曲目である《をみなら起ちぬ》は、橋本國彦の作品としてまだ世間で認識されず、どの作品一覧にも記載されていない。深尾須磨子(明治21[1888]年11月18日～昭和49[1974]年3月31日)の著作権が全信託されるJASRAC(日本音楽著作権協会)でも管理楽曲として登録はなく、演奏実績も確認されていない。加宮氏に伝えられた通り、未発表の可能性が高そうである。時代の要請から生まれながら、世に出る機会を逸した曲なのであろうか。

「日本放送協会」と印刷された五線紙に書かれ、演奏時間も記されている。譜面は経年劣化に加え、練習に用いられたと想像させる汚れや傷みが目立つ。演奏の機会をうかがっていたところ、「戦没学生のメッセージ」の企画の中で、当時の学生を教える側にあった教員の作品として演奏することとなった。今回が公開初演となる可能性が高いため、JASRACを通じて深尾須磨子の著作権継承者より公表権\*の許諾を得て演奏する。

\*公表権:著作権法第18条に規定される著作者人格権の一つで、未公表の著作物を公表するかどうかを決定する権利。橋本國彦の著作権は保護期間満了したが、深尾須磨子の著作権は保護期間内である。

今回の演奏に用いるピアノ伴奏版の楽譜冒頭には、「原曲 管絃楽伴奏曲」「メゾソプラノ独唱 或は女声三部合唱曲」「をみなら起ちぬ」「深尾須磨子詩 橋本國彦作曲(昭和十九年九月七日)」「演奏時間5分30秒」と記されている。

詩の原文や出版物が未確認のため、譜面に書き込まれた歌詞を、繰り返しも省略せず記す。[ ]内は筆者が暫定的に漢字に置き換えたもの。

いさぎよく いさぎよく いさぎよく たもとをたちて [袂を断ちて]、  
 いさぎよく いさぎよく いさぎよく たもとをたちて、  
 こぞりたつ やまとをみな きほいたつ [気負い立つ]  
 やまとをみな やまとをみな をみならたちぬ  
 つよきもの つよきもの つよきもの やまとをみな  
 つよきもの つよきもの つよきもの やまとをみな  
 ををしき [雄々しき] もの やまとをみな  
 ははもたちぬ [起ちぬ] つまもたちぬ ははもたちぬ をとめもたちぬ  
 でんとうの ちしほはたぎり [血汐は滾り] くろかみの  
 ほこりにもえて いざこえむ いざこえむ すゐくわのしれん [水火の試練]  
 ますらをに ますらをに おくれはとらじ おくれはとらじ おくれはとらじ  
 いざこえむ すゐくわのしれん ますらをに おくれはとらじ おくれはとらじ

詩の数語を時代背景に照らして記してみよう。「をみな」は乙女や少女を指す古語である。歌詞には「やまとをみな」「をとめ」等の言葉も出てくる。作曲された昭和19年9月という時期は、鬼頭恭一と村野弘二等の「出陣学徒」が前年12月に入営してすでに9箇月、19年3月には葛原守が、同6月には草川宏も召集された後である。東京音楽学校ではこの後11月には徴兵年齢前の男子学生が集団で兵庫県へ学徒動員される。強き男たち「ますらを（益荒男・丈夫）」が次々に戦いに出て不在になり、女性にはかつてない役割や強さが求められる。母も起ち、妻も起ち、をとめ（乙女・少女）も起ち上がるのである。全体的な趣旨としては女子学生への鼓舞であろう。次は「たもとをたつ」である。「袂（たもと）」を使う言い回しとして「袂を分かつ」は一般的だが、「たもとをたつ」は馴染みが薄いのではなかろうか。「学徒出陣」が行われた昭和18年秋頃には国民生活全般にたいして贅沢が戒められ、“贅沢は敵”との標語が叫ばれるようになる。婦人雑誌やグラフ誌も節約生活、節約料理を載せている。女性の服装で、腰回りをゆったりさせ、足首の部分を絞った労働用ズボン「もんぺ」は知られているが、着物の長い袖を断つよう促す「断袖運動」もあった。「袂を断ちて」の一言で決戦下を生きる女性の姿を象徴するのであろう。

四分の四拍子、開始はト短調。ピアノの前奏が47小節あり、堂々たるスケール感と存在感を持って繰り広げられる。指定通り5分30秒に収めるには、駆け抜けるような軽快なテンポで、ピアノは激しく連打し、歌も起伏の激しい旋律を決然と歌い進むことになる。詩は前半と後半の間にピアノの独奏部分をはさみ、途中から長調に転ずるが、それによって詩の展開を音楽によって際立たせている。着物姿の美しさによって大切な袖を断って自らを鼓舞するあたりは音楽も悲壮感を漂わせているが、「伝統の血汐はたぎり」からト長調に転じ、強き女性たちは、着物の美しさではなく、日本

伝統の血汐や黒髪を誇りに、如何なる試練も乗り越えていく。曲のスケール感と迫力を発揮するには、原曲版の管絃楽が似つかわしいように思われる。

紀元二千六百年（昭和15年）頃から、東京音楽学校でも国威発揚のための演奏曲目や出張演奏が目立つようになるが、そこで作曲、編曲、指揮の全てにおいて最も活躍した一人が橋本である。出張演奏はその目的や規模に応じて参加者が異なるが、旅の道中などで普段の学校生活にはない師弟の交流も行われた。当時の生徒が語る橋本國彦は、まず一様に“ダンディ”、次に“駄洒落”である。橋本國彦は作曲の主任であったが、作曲専攻生に限らず、多くの学生にとって印象深く馴染みある存在であった。作曲部の草川宏と鬼頭恭一の作曲の師は信時潔、村野弘二の師は下總皖一（本名は覺三）とされるが、それは「自由作曲」の指導教員である。橋本が担当する理論や管絃楽法の授業では、卒業生によれば、フランス的な響きのみならず、戦時には敵性音楽とされたジャズまで紹介された。橋本は合唱や管絃楽の指揮者も務めたので、本科、師範科のほぼ全学生が、橋本の教えや人柄にふれていくことになる。器楽部ピアノ専攻に所属していた葛原守が作曲の添削を橋本に受けていたことは、残された譜面からわかる。太い鉛筆で修正や提案が書き込まれ、譜面の最後にある *Hashimoto* のサインや印鑑がその証拠である。橋本の添削は、草川宏宛に郵送された楽譜にも見られ、草川誠氏によれば、週に一度、橋本のレッスンがあり、その数日後に添削された譜面が届き、兄はそれを直して次のレッスンに臨んだ。

※ 橋本國彦の《をみなら起ちぬ》の演奏にあたり、譜面を寄贈された故加宮令一郎様、加宮葵様、写真資料その他情報提供くださった木村喬様、筆跡や演奏記録等の確認にご協力くださった三枝まり様、皆様のご協力にお礼申し上げます。

### 鬼頭恭一 《女子学徒挺身隊の歌》

鬼頭恭一（大正11〔1922〕年6月10日～昭和20〔1945〕年7月29日）は「学徒出陣」により昭和18年12月10日に呉鎮守府・大竹海兵団に入団、2月から5月にかけて三重海軍航空隊で基礎訓練を受けた。少尉候補として築城海軍航空隊に配属されていた昭和19年10月30日から11月3日にかけて、歌曲《雨》を作曲した。構想の断片は1冊の音楽帖に確認されるのだが、音楽帖の所々に残されたメモや日付から、それが鬼頭の配属中の所持品であったことがわかる。音楽帖には《雨》のスケッチ以外に、歌詞の書かれたもう1曲が存在し、今回、その復元を試みる。

譜面から輪郭は明確に伝わってくるが、推敲中の下書きと見られ、複数案が書かれ、作曲者が書こうとした音符の位置はどこなのか、推測や判読を要する箇所もある。そこから第三者が一案を選択して決定稿を作成する行為が、どこまで妥当なのかは意見の分かれるところであろう。音を鳴らさずに読譜する限り、複数案それぞれを頭の中で再生すれば良いので支障ない。しかし演奏するには複数案を順次演奏するか、いずれかを選ぶことになる。このような譜面を“鬼頭恭一作曲”と銘打って演奏すること

は、鬼頭の意に反するだろうか。鬼頭恭一のかげがえのない楽譜を大切にしていられただご家族にとっては、“研究”の名のもとに、強引に音を引っ張り出すような行為であるかもしれない。そもそも私たちは鬼頭恭一に直に承諾を得る手立てを持っていないのである。しかしながら、作品は歌われるため、聴かれるために作曲される。曲の演奏に消極的、というより戸惑っておられたご遺族が、最終的にはおゆるしくださったことに心から感謝している。前出の橋本國彦の作品や当時の東京音楽学校が置かれた状況を考え合わせれば、音楽学校に対する社会認識も、社会が音楽学校生に期待した役割が那邊にあったのか想像されよう。鬼頭は与えられた歌詞と向き合い、歌う人々をイメージしながら作曲家としてひたむきに音楽に向き合ったことであろう。演奏には幾多の判断を要するが、作品が生まれ出ようとする葛藤の坩堝に傾聴しよう。

曲全体がノート見開きの左ページに書かれ、歌詞が1番のみ書き込まれている。しかし繰り返し記号の書き方から見て、歌詞は4番まであったと推測される。無題のため、譜面に見える「われら女子学徒」「挺身隊」などの歌詞に基づき、《女子学徒挺身隊の歌》を仮題とした。見開きの右ページには、左ページと同じ歌詞の一部と別の旋律が書かれ、別の和声付けもある。左ページには、ピアノ伴奏と旋律の合わない小節もあるが、それは一通り書いた曲に対して、別の案を思いつき、歌の旋律だけ書き換えたためではないだろうか。作曲者の頭の中では自然に流れる音楽が出来上がったが、音楽帖に残された音符は推敲中のもので、決定稿ではないだろうと推察されるのである。

この曲の浄書は、鬼頭恭一をホームページ「日本の作曲家10」で紹介してこられた岡崎隆氏により《女子挺身隊の唄》として作成されていた。今回の演奏は、それをもとに音楽帖を見直し、曲の完成イメージからあり得べき響きを掬い取る試みである。

歌詞は一部を除き平仮名で書かれている。[ ]内は筆者が漢字に置きかえたもの。

神洲むきう [無窮] のあめつち [天地] と さかえるくにの [栄える国の]  
女子がくと [学徒] おほみことのり [大詔] かしこみて [畏みて]  
そこくのなんにかんぜんと [祖国の難に敢然と]  
いざたてわれら ていしんたい [挺身隊]

特攻を志願した鬼頭にとって、五線譜を前にするわずかな時間だけが、心を注ぎ出すことのできた時間だったのではなかろうか。作品の決定稿の“出現”を願う。本格的なオペラの作曲をも夢見た鬼頭恭一であったが、女子学徒を励ます作曲依頼に対し、ともに戦時を乗り越える同志として勇壮で高揚感ある歌を贈ったのであろう。ノートの譜面から推測されることは、鬼頭はノートに大方を記し、頭の中で音楽としてまとまった段階で別の五線紙に清書し、依頼者に渡したのではないか、ということである。

目下、築城付近に当時存在した女学校数校に協力を依頼しているが、戦後の学制改革により古い記録は失われ、築城海軍航空隊や挺身隊につながる資料や記録にはたどり着けずにいる。出来上がった歌を、作曲者の名前も知らずに歌った「女子学徒」が

いた可能性が少しでもあるなら、そこにたどり着くことは至難であっても、今しばらく、県史、市史など郷土史関係を含め、調査を試みる。

### 鬼頭恭一 《無題（アレグレット イ短調）》

作品は音楽帖とは別の五線紙に書かれている。無題のため、冒頭の「*Allegretto*」にちなみ《アレグレット》と呼んでいる。作曲年月日の記載はない。前述の《挺身隊》が書かれた音楽帖には、ヴァイオリンなどの旋律楽器とピアノのために書かれたハ長調の《アレグレット》（同様に無題）が作曲されているが、本日取り上げるのは、ピアノ独奏用のイ短調の曲である。a-b-aの三部形式。四分の二拍子の主部は決然たる力強い生命力に満ち、中間部は八分の六拍子、ニ長調に転じ、優美な舞踏を思わせる。もともと別に下書きが存在したのか、書き直しや複数案の推敲の跡はほとんど見られない。短調と長調の構成は、曲想も対照的で明快である。中間部が清潔感と晴朗さに満ちているだけに、主部の短調では対照的に悲壮感や焦燥感も滲ませている。歌詞のない音楽ゆえ、時代背景にとらわれずに演奏することも可能であろう。しかしながら、具体的な歌詞がないだけに、かえって鬼頭の音楽にかけた想いが言葉を越えて凝縮されているのではないかと想像される。

以上、こうして《アレグレット》について説明を試みたが、曲について、悲壮感、焦燥感といった言葉が浮かんでくるのは、鬼頭の人生がそれから遠くない日に断たれたことを知って書いているからではないのか、戦没学生の作曲という枠組みを外して作品自体に向き合っているか、書いては自問し、逡巡している。鬼頭が霞ヶ浦航空隊で最後の飛行訓練に臨んだのは、開発中のロケット局地戦闘機「秋水」のテスト飛行で犬塚豊彦大佐が殉職して間もない時期であった。二人乗りの練習機に搭乗した相手も出陣学徒であった。

### 草川 宏 歌曲《秋に隠れて》（島崎藤村詩）

《秋に隠れて》は、島崎藤村（明治5 [1872] 年2月17日～昭和18 [1943] 年8月22日）の処女詩集『若菜集』（明治30（1897））51篇のなかに〈初恋〉などとともに収められている。

わが手に植ゑし白菊の  
おのづからなる時くれば  
一もと花の夕暮（ルビ：ゆふぐれ）に  
秋に隠れて窓にさくなり

限られた言葉数に、白菊、それを慈しむ自分、自然界の営み、生命力、秋、夕暮れ、時充ちて咲く花、窓辺の情景・・・等、雄大にして細やかな場景が立ち現れる。藤村が

「秋に隠れて」において描く自然界は、作者の心と重ね合わせ、主観的な感懐を描くキャンバスとなっている。草川は、歌とピアノが一体感を持って協奏し、秋の情景と心情を重ねた世界への構成を試みる。ピアノが独奏する小節数は、歌唱部分より僅かに少ない程度であり、ピアノの役割は重要である。ピアノは情景描写、場面展開、心理描写など主導し、歌手は言葉を声にすることで表現をより視覚化、具体化し、想いを吹き込む。歌とピアノによって構成される新たな音楽世界への挑戦の跡が見える。

曲は昭和19年の初め頃には書き上げていたようで、草川宏（大正10〔1921〕年10月28日～昭和20〔1945〕年6月2日）の1月10日の日記には、新井氏\*から次のような批評を貰ったと書き留めている。「相当に感覚は鋭い。其の鋭さが滑稽度を超してゐる故自然さを失つてゐるきらひがある。転調にしても其れ故わざとらしさがある程だ。だが以前の作品から比べると兎も角可成りの進歩を見せてゐる」。新井氏の批評は、まず、詩に対する草川の感度の鋭さを評価し、挑戦する心意気も感じ取っている。そのうえで、妥協なき鋭さゆえに歌手に過度の負担を強いる傾向や、技巧を優先したためぎこちなさがあると指摘した点で、辛口だが正鵠を得ていると言えよう。しかしまたそうしたところにこそ若い作曲家らしい志の高さ、表現の独自性や面白さを見ることもできよう。草川は新井氏の言葉を次作への課題と受けとめたのかもしれない。草川家の衣食住にも戦時の影響が色濃くなっていたが、研究科に在籍した草川は、信時潔に歌曲の指導を仰ぎ、ヘルムート・フェルマーに二重フーガの厳しいレッスンを受けて作曲技術の習得に努めた。たとえば日本語の表現力を音楽で増幅し、詩と音楽によって情景を視覚的に構成するなど、一作ごとに新たな挑戦を続けていたのである。

\* 新井氏は、同級生ならば声楽部の新井潔氏であろうか（朴殷用。昭和17年6月に新井潔に改姓）

草川の日記によれば、彼はこの頃教員検定願を書いて就職に備えていたようである。昭和19年1月9日の日記の半分は寒さについてである。「夜ピアノを少し勉強したが、炭火の全く無い此の頃は寒さが身にじんじんとしみ入るので叶はぬ。其の辛さと云つたら到底筆舌等に尽せ得るものでは無いのである。一旦コタツに潜り込んだが最後、もう離れられぬ。コタツから脱け出るのには思い切って勇気を振り出さねばならぬ」

## 草川 宏 《軍隊生活》より

〈朝（夏の朝、日の出前後）〉

〈点呼ラッパ〉

《軍隊生活》と題される「作品」は、ボール紙を二つ折りにして表紙とし、五線紙を台紙に貼り付けて糸で綴じた小冊子で、出来上がりは縦14.8 cm、横10.5 cmである。表紙を開くと縦書きで「草川宏作曲 軍隊生活 皇紀二六〇四年十一月 父整理す」とペン書きされている。小冊子の作成者は父であることがわかる。父は作曲家の草川信（1893〔明治26〕～1948〔昭和23〕）である。一枚捲ると父の「はしがき」が、宏の入隊と曲の経緯などを2ページにわたり伝えている。それによれば、草川宏は昭

和 19 年 6 月 15 日に自宅近くの世田谷東部第十二部隊に入隊した。やがて南方向けの動員令が下り、父は 10 月 13 日に品川駅で宏を見送り、26 日に宏の東京音楽学校の先輩で広島在住の森田親之氏\*より広島駐屯を伝えられ、30 日に広島を出発することを知る。「はしがき」に、作曲は世田谷服務中と広島駐屯中に行われたとしていることから、五線紙は 6 月の入隊時に渡されたことがわかる。宏は作曲した五線紙を森田氏に託し、それが森田氏から父に送られたとのことである。曲が書かれた五線紙は 6 枚で、短い「曲」それぞれにタイトルや説明が付されている。「1」から「6」までページ番号が振られた「曲」を順にたどると、書いた場所や時期が想像できる。

\*森田親之は、広島市出身（大正 7 年 2 月生）で昭和 14 年甲種師範科入学、昭和 16 年 12 月卒業。草川誠氏より森田氏は原爆死されたと同った。同窓会名簿の物故者欄に昭和 20 年 8 月 6 日とある。

タイトルとおぼしき文字は、擦れたためか経年劣化のためか、薄くぼやけて判読は容易ではないが、下記のようなタイトルが見えてくる。[ ]は暫定、□は未判読を示す。タイトルの付されたものを全て曲として数えると 11 曲になる。①②…の番号と小節数は筆者が付したもの。

- |  |              |
|--|--------------|
| ①二六〇四九・一五「朝（夏の朝 日の出前後）」                      | 16 小節        |
| ②「点呼ラッパ」                                     | 12 小節        |
| ③「Presto 点呼（朝の）」                             | 16 小節        |
| ④「（〔童謡〕□「良き歌〔を〕欲す *」                         | 10 小節        |
| *仮に「□良き」としたが、閉じ括弧“”が見えず、“良”のところは漢字一文字かもしれない。 |              |
| ⑤「音信を〔き〕く <i>Andante</i> 」                   | 10 小節        |
| ⑥「射撃演習」                                      | 27 小節        |
| ⑦「川風景」（五つ 猶后夕陽一つ追加の予定）                       |              |
| 「魚釣」（広島藤田旅館前の川にて 19.10.25）                   | 14 小節        |
| 「立橋」   | 17 小節        |
| 「蒸気船川面を往く」                                   | 14 小節で繰り返し記号 |
| 「ボート遊び」*                                     | 14 小節        |
| ⑧「山を望む」                                      | 16 小節        |

\*「川風景」の括弧内に「一つ追加の予定」とあるので、「ボート遊び」までを「川風景」とした。

作曲には鉛筆書きがほとんどで、一部にインクが使用されている。文字や音符は書かれた時点ですでに薄かったのかもしれないが、ぼやけて薄く、現段階で判読に至らない文字もある。今回再現するのは、冒頭の〈朝〉と〈点呼ラッパ〉である。〈朝〉はピアノ譜、16 小節である。小さな五線紙は、父への「たより」でもあったのだろう。想いを伝えたくとも手紙では検閲を通過できる内容しか書けないが、音に託せば、身近な風景や想いを自由に綴り、曲がりなりにも音符を書く感覚を保つこともできたのであろう。音符や文字の消えかかった譜面もまた「戦没学生のメッセージ」である。草川が入隊前は好きな詩を選んで意欲的な作曲をしていたことを思えば、《軍隊生活》



は彼の作品と呼ぶには痛々しいが、それは父にあてた音の手紙であり、文字通り戦没学生のメッセージである。数葉の譜面を受け取った父が、それをどれほど大切にしておられたか、宏の薄れた鉛筆の跡と父の「はしがき」と、簡素にして丁寧な製本が、全てを物語っていよう。《軍隊生活》の小冊子は、7月30日の「戦没学生のメッセージ」に先立つ報道でも一部取り上げられ、これからも丁寧に紹介していきたいと願っている。演奏にあたり、《軍隊生活》が私たちのもつに届くまでをたどっておきたい。

父は息子の入隊にあたり五線紙を息子に託した。宏は島崎藤村の詩に作曲していた学生時代とは別世界に身を置きながらいくばくかの曲を書きつけ、やがて五線譜を手放して南方に発った。父は息子の無事を願い、わずかな譜面を小冊子に綴った。病に伏した父に代わり、誠氏は兄の死を父に知らせず遺骨（実際には位牌）を引き取りに行った。まもなく父が亡くなり、兄の遺品は弟によって守られてきた。小冊子は、譜面に音符を書く宏の手振りや姿を浮かび上がらせる。私たちにできることは、その小冊子を（心の中で）自分の手でそっと開き、草川宏が書きつけた音楽を受け取ることであろう。

#### 村野弘二 独唱曲《小兎のうた》（島崎藤村詩）

演奏する2曲はいずれも、村野弘二（大正12[1923]年7月30日～昭和20[1945]年8月21日）が中学校を卒業してから昭和17年に東京音楽学校に入学するまでの一年間に書かれたものである。楽譜に作品番号や年月日が記されているのは、村野が自分を作曲者として自覚し、自分の作品と位置付けていたことの表れであろう。

《小兎のうた》の譜面には、「島崎藤村詩」「小島先生に」「Felix Philharmonic Library」「F.V.P.No.4」「T.59」「昭和十六年六月三日」と記される。小島先生への献辞、メンデルスゾーンの名前を冠した自分の「文庫」の番号など、村野の作曲家として生きる決意の強さが伝わってくる。作曲家としての村野を考える上で、小島先生の存在はきわめて重要であると思われるので、東京音楽学校時代の記録からわかることを記してみよう。小島幸（旧姓竹内）は、昭和10年3月に東京音楽学校甲種師範科を卒業した。通常、卒業演奏会には本科卒業生のみが出演するのだが、異例なことに竹内幸は師範科卒業生でただ一人、ソプラノ独唱でヴァーグナー作曲、歌劇《タンホイザー》中の〈エリザベートの祈り〉を演奏した。さらに昭和13年3月の研究科修了演奏会でメッツォソプラノとしてシューベルト作曲《魔王》を独唱しているのだが、竹内の名前は研究科には見あたらない。研究科以外も探してみると、昭和11年度と12年度に聴講生として在籍していた。東京音楽学校の規則では、研究科に入学できるのは「本科卒業者」で、それ以外の者でも試験により同等の学力ありと認められれば「許可スルコトアルヘシ」とされたが、彼女は聴講生として勉強を続け、研究科の修了演奏会に出演した。それだけの実力が認められていたとしても、東京音楽学校の卒業演奏会の歴史でも異例中の異例である。小島幸は日本音楽コンクールに入賞し、数々のオペ

ラにソプラノ歌手として活躍し、昭和 61 年、神戸市の文化功労者（藝術）に選ばれた。平成 19 年 12 月に 97 歳で世を去った。村野が「小島先生に」作品を捧げた昭和 16 年頃までに結婚し神戸に住んでいたのであろう。

作曲家志望の青年にとって、自分が書いた曲を、一流のソプラノ歌手が本格的な歌唱で目の前で歌ってくれたら、これほど幸せなことはないであろう。実際に歌われるのを聴くことで、誰かに指導されるまでもなく、自ら気づき、自分の耳を育てることになる。小島先生には音楽上の助言も貰えたことであろう。《小兔のうた》から《白狐》の〈こるはの独唱〉に至るまで、村野が声楽作品を書く際には、頭の中で小島幸先生の歌をに導かれながら、ペンを走らせていたのではないだろうか。

島崎藤村の「小兔のうた」は、明治 31（1898）年 7 月に藤村が木曾福島に義兄を訪ねて同地で一夏を過ごしたときの詩で、同年 12 月に刊行した第三詩集『夏草』に含まれる。ルビを括弧書きで添える。

ゆきてとらへよ 大麥の 畠にかくるゝ 小兔を	麥まきどりの きなくより 丸根(まるね)に雨の かゝるまで	われらがつくる 麥畠(むぎはた)の 青くさかりと なるものを
われらがつくる 麥畠(むぎはた)の 青くさかりと なるものを	朝露(あさつゆ)しげき 星影(ほしかげ)に 片(かた)さがりなき 鍬(くは)まくら	ゆきてとらへよ 大麥の 畠にかくるゝ 小兔を
たわにみのりし 穂のかげを みだすはたれの たはむれぞ	ゆふづゝ沈む 山のはの こだまにひゞく はたけうち	(『日本現代文學全集 19 島 崎藤村集 (一)』講談社 (昭 和 40 年) より)

主題は畑に出没する小兔だが、自然界の扱い方は前作の『若菜集』や『一葉集』とは異なり、農民が小兔に麦畑を荒らされて心配するさまを、農民の側から客観的に詠っている。装飾的な要素も控えめに、より写実的になっている。農民の心情と、すばしこい小兔の動きが作曲のポイントと言えようか。

村野は農民と小兔の、深刻だが滑稽味もあるかけひきを、「快速調」で、ピアノ前奏のホ短調、四分の二拍子、軽やかで素早い動きに託す。「歯切れよく」と記された歌のパートは冒頭から「ゆきてとらへよ」をスタッカートで技巧を聴かせ、前

打音を小節（こぶし）のように効かせながら小兎のすばしこさと、追う農民のかけ合いで進んでいく。ここまではいわば説明的な“語り”である。対照的に「たわにみのりし穂のかげを／みだすはたれのたはむれぞ」「ゆふづゝ沈む山のはの／こだまにひゞくはたけうち」はト長調に転じ、流れるような旋律で、農夫の心情が歌われる。基本的には西洋音楽の和声学に則っているが、近代の日本の作曲家が、日本語の詩を生かす作品の創出を模索したように、《小兎のうた》では歌詞を生かすための工夫から日本的な旋法を取り込んだのであろうと考えられる。

### 村野弘二 詩曲《秋はむなしうして》

村野自身によって「小品集 No.6」とされ、楽譜の最後には「昭和十六年九月廿七日完、全九月廿九日寫」、そして「*Koji Murano*」のサインがある。

「詩曲」の構想を村野はどこから得たのだろうか。エルネスト・ショーソン（1855～1899）の《詩曲》（1896）やウジェーヌ・イザイ（1858～1931）の《哀しき詩曲》Op.12（1892～93）がヴァイオリンと管絃楽のための作品であるのに対し、ロシアの作曲家アレクサンドル・スクリャービン（1872～1915）はピアノのために《二つの詩曲》を5回、その他に5曲、計15曲を作曲した。山田耕筰もスクリャービンに触発されて作曲している。村野が影響を受けた音楽の全容は定かではないが、スクリャービンを知る機会もあったのだろうか。

譜面の最後に横書きで詩が書いてある。同年の作曲でも《小兎のうた》には島崎藤村作詞と明記されているのだが、《秋はむなしうして》には作詞者が記されていない。歌詞の典拠も探し出せていないが、姪の中林敦子氏は「自作ではないと思う」とのお考えである。ご存知の方は、どうかご一報ください。

※ [ ] 内は筆者が付した読み。

秋はむなしうして 空に漂ふ愁 [うれひ] あり  
虚しき秋の空に抬 [もた] ぐる銀杏 [いてふ] の枝に悩 [なやみ] あり  
散り残れる黄なる葉の 色冴えに冴えて  
湫々\*として風に戦 [そよ] ぐを見る。

\*うれしい悲しむさま。すすり泣くさま。

秋はむなしうして 空に漂ふ愁あり  
虚しき秋の空に 充ち溢れたる悩あり  
くちずさみし歌の こだまこだまして  
漂々と浮び行くを見る。

曲は四分の四拍子、フラット一つで、へ長調で終結するが、五音音階が旋法的に用いられ、調性が明確化するの曲がだいぶ進んでからである。秋の空、イチョウ

の枝、散り残った木の葉が風にそよぐさま、すべてがはかなく、時の移ろいを映し、もの悲しく、もの憂い。村野は中学校を卒業した年代で、かくも深い悲しみと絶望感を湛えた詩を創作の源に据えていたのだ。日本的な趣をピアノで奏でようとするのは、日本の詩心を西洋的語法で作曲するという課題への一つの答えであろうか。

村野弘二氏の作品については、神戸の実家にのこされた以外は、疎開させた福井が空襲に遭い焼失したため、東京音楽学校入学後のものは一部を除き失われた。中林氏作成になる一覧表では、中学校在学中の3曲、卒業後の一年間の5曲が確認され、歌曲、ピアノ曲、室内楽等、編曲など種々の探求が窺われる。

### 葛原 守 《自由作曲（オーボエ独奏曲）》と《オーボエ独奏曲（無題）》

葛原守（大正11〔1922〕年10月22日～昭和20〔1945〕年4月12日）は本科器楽部でピアノを専攻したが、童謡作家、作詞家、教育者の父・葛原函（しげる）（1886〔明治19〕～1961〔昭和36〕）の家に多彩な文化人が訪れていたことも影響したのか、守も既製の作品を演奏するだけでなく、作曲にも熱心であった。音楽学校生は、作曲専攻でなくとも和声学を学んでいたが、葛原は好んで作曲して橋本國彦の指導を仰いだようだ。

取り上げる二つの作品は、いずれもオーボエとピアノのための作品で、同じモチーフを素材として使用している。そのモチーフは歌曲《かなしひものよ》に聴かれる旋律である。通常の見方では、まず《かなしひものよ》の歌曲が書かれ、そこからモチーフを展開させて二つのオーボエ独奏曲が生まれた、ということになる。二曲はいずれも「本科二年」と書かれており、さほど時を措かず作曲されたのであろう。歌曲《かなしひものよ》についても、歌詞が自作であると仮定すると、旋律を先に着想したのか、歌詞があって旋律が生まれたのか、どちらの可能性もあろう。いずれにせよ、葛原にとって《かなしひものよ》は“心の歌”となり、歌曲を作曲して過去のものとなったのではなく、旋律は歌詞のない“歌”となって反復され、より規模の大きい曲へと熟成し成長したのであろう。

#### ◆《自由作曲（オーボエ独奏曲）》

表紙に「〔自由作曲（オーボエ独奏曲）〕本科二年 葛原守」と記される。インクで書かれた譜面に、鉛筆書きの修正や加筆が見られる。鉛筆書きの全てが教師によるものかどうかは判然としないが、ほとんどが教師によると見られる。最後に橋本の認印が押されている。演奏に際し、修正や加筆が施された部分については、修正後を基本とする。「ゆっくりと（♩=46）」、変ロ長調、四分の四拍子。ピアノ前奏は冒頭のピアノシモにデクレッシェンドが鉛筆で加えられ、静かな始まりとなる。オーボエとピアノが《かなしひものよ》の旋律断片を呼び交わす。譜面の始めの方に、鉛筆書きで「リズム（変へる）」という言葉と、付点と逆付点の音符が書かれ、実

際、作品には両方が使用されている。14小節目から現れる、流れるような旋律は《かなしひものよ》にも使われた旋律である。36小節より四分の二拍子「快活に（ $J=112$ ）」となり、この作品で最も活気ある箇所にあしかかる。この作品の最強音メゾフォルテが記されるのはここだけで、旋律の断片が変奏され、ついで46小節から変奏が変ト長調に引き継がれ、繰り返しをはさんでト長調を経過し、再び変ロ長調の流れるような旋律でテンポも戻って終結する。

#### ◆ 《オーボエ独奏曲（無題）》

五線紙が、一回り小型の音楽帖（リングノート）に、大きさを合わせて折りたたんで貼られている。表紙に「～ [ ] ～（Oboe 独奏曲）本科二年 葛原守」とあり、空欄のタイトル欄がある。「 $J=63$ 」四分の四拍子の短い前奏に誘われ、オーボエが歌曲《かなしひものよ》と同じ旋律を歌い出す。歌曲の旋律をそのまま用いているのがこちらの曲だが、前出のオーボエ作品の要素をも包摂して規模も大きくなり、力強さもあり、変化に富んだ曲となっている。

葛原は、弾いてみて心地よい響きを見つけ、それを音楽に紡ぎ出そうとしたのではないかと想像される洒落た和音を書いている。レッスンに持って行くために清書したのか、基本的にインクで書かれている。そのところどころに鉛筆の書き込みがある。原曲の響きを生かしつつ、不自然なところ、流れに整合性を持たせるなど、最低限の修正を加えているようである。終結部では橋本の鉛筆書きで1小節を削除し2小節を新たに書いてある。学生の作曲が教師によって添削、修正された場合、通常、修正後のもので演奏される。今回も修正後の状態で演奏する。

この曲は平成29（2017）年7月30日の「戦没学生のメッセージ」（東京藝術大学奏楽堂）でも演奏された。平成26（2014）年11月23日、福山市神辺町（かななべちょう）の「第39回神辺音楽祭」にて横田幸恵のオーボエ、佐藤恵美子のピアノによる演奏が戦後初めての演奏である。

歌曲《かなしひものよ》を軸に、二つのオーボエ作品を作曲したことが教師の指導によるものか、自発的なものか図りかねるが、同じ素材を繰り返し用いて展開の可能性を探る実践には興味深いものがある。葛原の作曲に書き込まれた教師の修正もまた貴重である。葛原と橋本がこの譜面に向き合った時から76年を経て、音楽として聴くことができるのは葛原家が遺品を大切に守って来られたおかげである。

葛原守の譜面は、昭和10年代後半の東京音楽学校で行われていた作曲教育の一端を知らせるとともに、数々の貴重な情報をもたらしてくれる。作曲部以外の学生でも歌曲や室内楽を書き、教員もそれを指導していたこと、葛原が書きたい音楽はまだ彼にも見えていなかったかもしれないが、書きたい音楽はまだあったと想像されること。そこに刻まれた想いをメッセージとして人々に届ける唯一の方法は、繰り返し実際に演奏することであり、演奏の機会を作り続けることであろう。

葛原守と草川宏は同学年で親しくしていたそうだが、父親同士・葛原函と草川信も交流があり、御子息同士は音楽学校入学前から互いに知っていたようである。兄・草川宏と仲良しで兄の交友関係もよくご存知の誠氏も「葛原さんは家に見えたことがある」と記憶しておられる。二人は昭和18年9月に本科を卒業し、葛原は半年後に召集されたが、召集についてはご遺族側の記録から確認されるのであって、学校側の公文書では確認されていない。遺品のなかに、年月日不明だが「葛原守殿 出演謝金 20」の記載のある伝票が2枚確認されている。当時の20円は今の5000円程度に相当しようか。税金2円40銭で「差引支払額」は17円60銭とある。これとは別に収入を記録したノートがあり、昭和18年9月頃のページに「放送」という記載が数回ある。放送記録が残されているだろうか。将来を嘱望されるピアニストとして活動を開始した、まさにそのような時期に葛原守は召集されたのである。

+:+:+:+:+:+:+:+ <のこされた楽譜を蘇らせ、後世に伝える> +:+:+:+:+:+:+:+  
+:++ 「戦没学生のメッセージ～アーカイブ推進コンサート1」に寄せて +:++

四人の戦没学生が残した作品の存在意味の大きさを実感する。譜面その他の遺品に向き合い、保管してこられたご遺族からは折々に種々の情報をいただいていた。戦時下に生き、そして散った四人の人生をどう受けとめ、何を引き受け、何を伝えるか、という大きな課題を投げられている。今は、戦没学生が生きた時代を、ご本人を直接知る方々から多少なりとも教わることの出来る最後のタイミングである。この重要な節目に居合わせた私たちがしっかり“つなぎ目”とならなければ次代に伝わらなくなることは目に見えている。そこで、残された譜面には判読が難しいもの、完成に至っていないもの、記譜に誤りや不備の認められるものがあったとしても、作品を眠りから揺り起こし、譜面に刻まれた想いを聴き取ろうと考えている。四人の方々には、このプロジェクトを機に永くこの世に生きて働いていただくようお願いしたい。作品のなかに、「戦没学生の」という断り書きぬきに知られていく作品もあれば良いと思う。しかしながら当面は、戦没学生の作品ゆえに生き続ける使命がある。戦後の人生を与えられなかった戦没学生だが、作品が演奏され、聴かれる限り、人々の中に生き続けることであろう。彼らと作品の使命は重大であると言わざるを得ない。彼らの作品を生かしていくことがまずは重要である。私たちはその始まりに参画させていただいている。次の世代がより深く検証し、確実に生かしていくことを願う。(2017.11.20 橋本久美子)

+:-+:-+:-+:-+ <出演者プロフィール> +:-+:-+:-+:-+

山下裕賀（メゾソプラノ）

東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。同大学院修士課程オペラ専攻修了。学部卒業時に同声会賞を、大学院修了時にアカンサス賞を受賞。第23回友愛ドイツ歌曲コンクール学生の部奨励賞受賞。第21回コンセール・マロニエ21第1位。藝大オペラ第61回定期公演モーツァルト《フィガロの結婚》ケルビーノ、ビゼー《カルメン》メルセデスで出演。宗教曲では、第64回「藝大メサイア」、モーツァルト《レクイエム》、ベートーヴェン《第九》等のソリストを務める。声楽を、藤花優子、伊原直子、菅英三子の各氏に師事。現在、同大学院博士課程オペラ専攻1年次に在籍中。

藪内俊弥（バリトン）

東京藝術大学大学院修士課程独唱科修了。第12回日仏声楽コンクール第2位入賞。第23回奏楽堂日本歌曲コンクール第2位入賞。《メサイア》、《第九》、フォーレ、モーツァルト等のレクイエム、バッハの受難曲、カンタータのソリストを務める。オペラでは東京室内歌劇場公演や、新国立劇場公演に出演。また《ラ・ボエーム》マルチェッロ、《ドン・ジョヴァンニ》タイトルロール、《フィガロの結婚》アルマヴィーヴァ伯爵等演ずる。《ランメルモールのルチア》エンリーコで、ルーマニア、コンスタンツァ国立歌劇場に出演。中国西安、北京にて《ドン・ジョヴァンニ》タイトルロールを演ずる。日本演奏連盟、日本声楽アカデミー各会員。二期会会員。聖徳大学音楽学部講師。

田中翔平（ピアノ）

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校、同大学音楽学部器楽科を経て、同大学大学院音楽研究科修士課程ピアノ専攻修了。修了時に大学院アカンサス音楽賞及び藝大クラヴィーア賞を受賞。これまでにピアノを筒井憲子、播本枝未子、倉沢仁子、E.ポヴウオツカ、M.シェーファー、東誠三の各氏に、室内楽を青柳晋、玉井菜採、松原勝也、松本和将、山崎貴子、山崎伸子の各氏に師事。

河村玲於（オーボエ）

大分県出身。14歳よりオーボエを始める。大分高等学校を卒業後、洗足学園音楽大学を経て、東京藝術大学別科を修了。これまでにオーボエを高田喜夫、小畑善昭の両氏に師事。室内楽を千葉直師、辻功、河村幹子、山根公男の各氏に師事。洗足学園在学中に特別選抜演奏者に認定され、また試験優秀者による室内楽コンサートにも出演する。

古土井友輝（トランペット）

広島県出身。9歳よりトランペットを始める。東京藝術大学音楽学部器楽科を卒業。これまでにトランペットを白石実、杉木峯夫、古田俊博、栃本浩規、佐藤友紀の各氏に、室内楽を稲川榮一、守山光三、栃本浩規の各氏に師事。浜松国際管楽器アカデミーにてP.メルケロ、J.トンプソンのマスタークラスを受講。受講者選抜コンサートに出演。第24回中国ユースコンクール金管楽器部門において優秀賞を受賞。現在、フリーランスのトランペット奏者として都内のオーケストラやアンサンブル、レコーディング等で演奏活動を行う。台東区外部指導員。ブリッツ・フィルハーモニック・ウインズ、アンサンブル・ルヴァン、ダイナマイトイレブン、各メンバー。

松岡あさひ（ピアノ）

幼少より音楽家の両親からピアノ・作曲を学ぶ。東京藝術大学音楽学部作曲科首席卒業。アカンサス音楽賞、同声会賞受賞。同大学院音楽研究科修士課程作曲専攻修了。2011年奏楽堂日本歌曲コンクール作曲部門第1位。2012年より文化庁新進芸術家海外研修員として、ドイツ・シュトゥットガルト音楽演劇大学に2年間留学し、作曲とオルガン演奏法を学ぶ。現在、東京藝術大学演奏芸術センター教育研究助手。

河村俊郎（トークゲスト）

大正12（1923）年、静岡県生まれ。官立無線電信講習所（現・電気通信大学）を繰上げ卒業、南方に従軍。その後、シンガポール、マニラ、ルソンに移り、バギオ市陥落まで活動。米軍のビラで敗戦を知り、昭和20年9月25日、米軍の収容下に入る。ともに学徒出陣した学友でマニラに配属された40名のうち、生還者は3名と考えられている。生還者とともに比島へ31回収骨と巡拝の旅をし、ビルマ、インド、辺境ジャングルにも入る。

「戦没学生のメッセージ～アーカイブ推進コンサート1」

企画・構成：大石 泰（東京藝術大学演奏芸術センター）

橋本久美子（東京藝術大学音楽学部大学史史料室）

録音：亀川 徹（東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科）

※無断転載・複写・引用等を禁じます